

tab

No.
34

2
0
1
2
/
08
/
15

後藤美和子 / 野村龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 岩田英哉 / 水島英己
秋川久紫 / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

後藤美和子・そとく／01

野村 龍・輝き／02

長尾高弘・食器／04

福島敦子・かしわ手おぼあそび／05

秋川久紫・戦禍舞踏論・まなゆめ／07

水島英己・みなしごたこえ／11

倉田良成・水の女／13

文

岩田英哉・Hart Craneを読む。2 — midnight press poetry rounge 2012/06/02 45／14

あとがき集／19

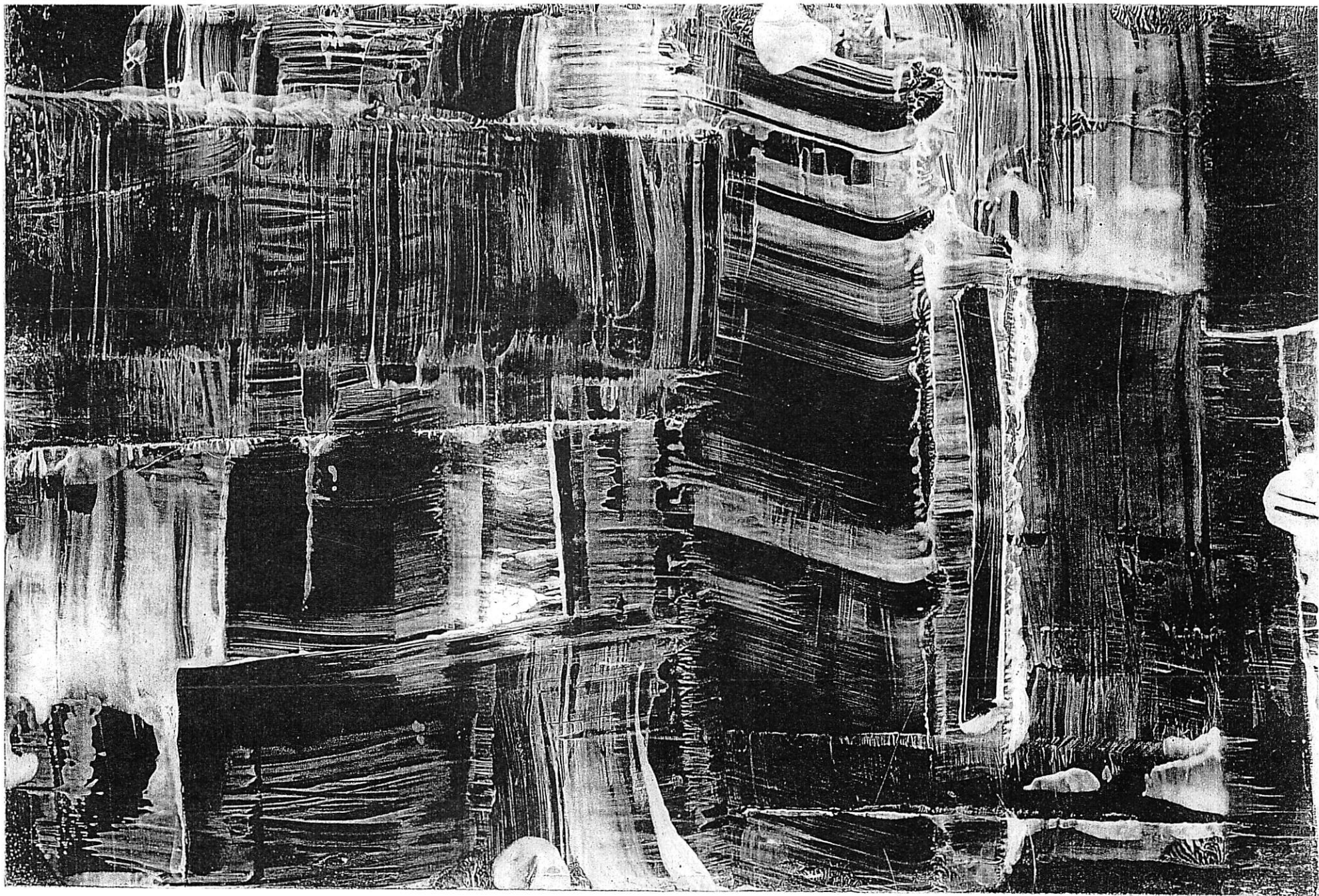
画・和田彰


tab 第34号／2012年8月15日

編集発行人／倉田良成

〒2300-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateisi511@k3.dion.ne.jp



7-かの技法  2012

後藤美和子

そとへ

あの東屋には行きたくなかった
散歩道にも

時間が来て手を振ることも

斜めに歩くことも

夕日にくぐもったガラス越しに見る

その輪郭がいくら美しかろうと

スーツケースを手に

首都をさまよった記憶、と

ツアラの息子は言った

思想の胞子しか期待していなかったのに

身体を増殖させていた

そとの緑

出てきたら、指を紡ごう

触れたくもなかったあの小道で

縦にも横にも割かれることのない

両手から弾かれるのは

ゼロか不可算の、そして見えないものだろう

(皆既蝕六四)

輝き

彼は誰時 彼方から
俯いた泉が歩いて来る

ラズベリーの歌が ひとしづく
泉の瞳に注がれる

折り重なる鐘の音の 只中を漂いながら
病に捕まってしまわれた方のために 祈る

採れ立ての蜜のインクで
御使いに 薄桃色の楽譜を綴り

深く息をつく
麝香の細胞が少し崩れてしまう

《今日は 誰がらも手紙が届きませんでした
明日というノマドは 今頃どのような色の 泡のなかで眠っているのですよ
う》

いま 欲しいものと言ったら ぼたぼたと言葉の滴る
フリージアの花束かな

辺境の地も なかなか捨てたものではない
斑猫が 爪先からすぐのところまで 青い道を描いてくれるから

最初は 臃だったものが 次第に色づき始め

飴のような白長須鯨となって ゆっくりと ちいさなちいさな夢を見る

空中庭園に入るための 澄んだ鍵は 手に入れたから
もう何も心配はいらない

ふいに香りのいい微風が吹いて

あの夕立のことを また思い出す

食器

母親は十年以上前に亡くなり、
一人暮らしで頑張っていた父親も、
足腰が立たなくなつて施設に行った。

それ以来その家は空っぽだったそうだけど、
施設で必要なものがあつたので、
息子さんが久しぶりに帰つたんだつて。
そうしたら、

棚から食器が落ちて割れていたんだつてさ。

一瞬、泥棒か？と思つたけど、

そこまで部屋は荒れていない。

そこで思い出したんだつて。

前に来てからそれまでの間に、

三・一があつたつてことを。

そして昔はその家にも

生活つてもものがあつたなあつてことも、
ついでにね。

福島敦子

かしわ手おばあさん

車椅子に座ったまま

かしわ手を打って深くこうべを垂れている人がいる

ばんばんばんばんばんばんばん…

施設の廊下の壁に向かって

窓に向かって

空中に向かって

ばんばんばんばんばんばんばん…

かしわ手おばあさん

目はどこか遠いところを見ている

若い頃

わたしは信仰をして

父はそのことを嫌った

いろいろあって

信仰をやめて

祈ることが嫌いになった

祈ることより行動して現実を変えるほうがいいと思ってきた

だけど もう わたしは いのる ことしか

父に してあげられることはない

かしわ手おばあさん

父に会いに行く施設の廊下で

あなたにを見かけると涙が出てくる

まぶしい むき出しの信仰心

消えていく記憶の中から

ますます そのことだけがあらわになって

ばんばんばんばんばんばんばん…

手すりに向かって

ベッドに向かって

空中に向かって

深くこうべを垂れて

ばんばんばんばんばんばんばん…

わたしも もう いのる ことしかできません

そつと

手を合わせて

いのる 不思議な

いのちの衝動に

身をまかせて

戦禍舞踏論

ここまで来れば、もはや追っ手は現れないだろうという見立ては、鉄楔や吹き矢や砲火が奏でる室外楽によつて、幾度となく棄却された。さらに、緑色の血飛沫の聖洗を受け、追憶のフィルムを無自覚に再生することは、直ちに己の破綻を意味するのだと、否応なく知らされた。漸く辿り着いた隠れ家の中には、監視のための仕掛けが幾重にも施されていて、どれだけ配線を付け替えてみた所で、その底意地の悪さを無化することなど到底かなわなかった。

さて。

白象も獅子も、麒麟も孔雀も、恐らくこの戒嚴の季節を瞬時に終わらせることは出来ないだろう。断片化してしまつた心を集積し、あるいは魂を強く反転させて、刹那的にその舌先を淨めることが出来たとしても。

それはただ慈しみを湛えた阿弥陀如来や弥勒菩薩とて同じであり、それゆえ、我々は煌びやかな舞踏によつて、やがて世界をプラチナ箔の一双屏風の中に塗り込める力を持った観音が現れるのを待つしかないのだ。

そう。

観音の誇り高く、伸びやかな姿態だけが、邪気や悪鬼を眩い月光の中に封じ込めることが出来る。そのしなやかな指は手負いの動植物たちを忽ち蘇生させ、リズムカルな脚の運びは末世を覆い尽くす風塵や雷鳴をも易々と統御してしまふ。そして、虚空に美しき円環を浮かべ、即座にこれを断ち割り、その内側に碧い焰を立ち昇らせたかと思うと、一気にこれを霧散させる。戦禍の中にあつては心優しき祈りより、まず極限まで熟達した舞踏が必要なのだ。

まなゆめ

K老人と付き合い始めて、かれこれ八年くらいになるだろうか。M駅周辺の再開発事業を皮切りに、大型の不動産取引をいくつか成約させてもらった恩義もあり、自分はこれまでどんなに厄介な頼み事であっても、老人の望むことなら大抵叶えて来たつもりだ。特にこの二年間に竣工まで漕ぎ着けた三つの取引において、既に四千万円以上も儲けさせてもらったのだから、そのためにはいくらかでも汗をかくつもりだし、自分が支払える程度の金額なら、何時だって惜しまずに出す気構えでいた。だが、今回ばかりは、自分が汗をかいたり、ただ金を出したりすれば済むような話ではない。また、この業界では良くある強者のための色事の助太刀と単純に割り切れるようなことでもなかった。それゆえ、老人からその申出を初めて聞いた時には、大抵のことでは驚かない自分も若干狼狽えてしまった。

いくつかの持病を抱え、間もなく米寿を迎えようとしているK老人は、ある時、夢枕に何かが立ったらしく、雷に打たれたように自分の死期を悟ったらしい。そして、つい先日、「俺は死ぬ前にどうしてもしておきたいことがある。そのためにお前さんの力を貸してくれないか？」といったもの笑顔ではなく、やや硬い表情を浮かべて、遠慮がちに語り始めたのだ。それは、男であれば誰でも考えそうな、至極健全な願いと言えた。だが、老人は別に性交や性愛の行為そのものを望んでいる訳ではなく、加えてそこには多少の純朴な気持ちも含まれていて、大前提として「相手は、決して商売女でないこと」という条件が付されていたことが自分を悩ませた。いくら大金を積まれた所で、果たしてうら若い素人の女性が、死期を迎えつつある老人のために、黙ってそのような申出に協力するものだろうか？

老人が「旅立つ前には是が非でも実現したいこと」に理解を示し、相手をすることに応諾した女性に対して、支払っても良いとして提示した報酬は百万円である。そして、老人から託された願いを叶えるため、自分は意を決して馴染みの酒場を何軒も廻り、取引に応じてくれそうな女性を探さなければならなかった。

だが、ことは単純ではない。未だ接触頻度が浅い女性に対してそのような怪しげな取引を持ちかけたとしても、話しの信憑性そのものに疑義を呈されてしまふ懸念もあった。さらに相手は誰でも良い訳ではなく、老人のお眼鏡に適うような可憐さを湛えたタイプを探すのは至難の業だった。もちろん、新聞や雑誌に広告を打つ訳にもいかない。不動産取引ではよくある公募競争入札みたいなことをしたら、売買春の嫌疑を掛けられ、それこそ手が後ろに回ってしまう危険性もあるだろう。

純朴さを潜ませた老人の申出を受けてから既に三週間が過ぎ、さすがにどうしたものと考えていた時、ふと一年前に亡くなったある取引先の営業担当者の未亡人のことが頭をよぎった。その男の体軀は頑強そのものという感じだったのだが、実は難病を患っていたらしく、ある日突然、呆気ない最期を迎えてしまった。列席者の誰もが打ち拉がれた面持ちでいた葬儀の席には、小さな子供を連れ、気丈に振る舞う未亡人の姿があった。神々しさすら漂わせた彼女はその後、亡夫の勤務先から支払われた死亡退職金を元手に、隣町で小さな花屋を開いていたはずだった。支払われた保険金も死者の蓄えも潤沢とは言い難く、そんな彼女の暮らしぶりが決して楽でないことは容易に想像がついた。と同時に、K老人は恐らくその彼女と取引したがるに違いない、という確信に似た思いが自分を捉えた。

實華子という名のその未亡人に対して、老人との取引の話しを切り出すには、かなりの勇気が必要とした。だが、自分には引き返せないミッションがある。一周忌を迎えての弔問は単なる口実に過ぎなかつたが、謹厳実直を装った自分の黙禱姿を見て、寡婦は幾分警戒心を解いてくれたらしい。そこで、亡夫に関する想い出話しが一段落した所で、観音様に耳打ちするようにして、一気にK老人の願いと取引条件について話した。場合によって、ここで観音に引っぱたかれても仕方がない、と覚悟していたが、彼女は露程もそんな反応は示さなかつた。もちろん一瞬驚きはしたが、少し考えた後、黙って肯いて見せてくれた。そして、老人が好みそうな可憐な笑顔を湛えて「私は人魚になればいいのですよね」と言った。實華子が多少はその老人の素性を知っていたことが、商

談上、有利に働いた。

取引の当日、實華子はジーンズに白いブラウスという軽装姿で現れた。老人の広い屋敷には何人かの家政婦が雇われていたが、その日は重要な契約があり、お茶出しなども自分が引き受けるから不要だと言って、彼女らが出勤しないように手を打ってあった。灯りを落としたその広い客間の青畳には中央に厚手の布団が敷かれ、その上でK老人と實華子は初対面の挨拶をした。自分はすぐに退席しようとしたが「そこで見ていなさい」と言われて、行司役として取引に立ち会うことを義務付けられた。實華子は老人について自身が知っていることを口にし、老人の生涯に添うようにして昭和時代の流行歌について語った。老人は奥村チヨの「終着駅」が最も好きな曲だったと言い、實華子もその曲は大好きだと応えた。やがて、両者の会話が途切れ、未亡人は白いブラウスを脱いで身体を横たえた。

下半身には決して触れぬことが、取引の条件となっていた。だが、万が一の時の自衛と、相手を不必要に刺激しないようにするためという二つの理由から、實華子は敢えてジーンズを履いて来たのだ。老人は實華子の背後に廻り込み、最初はゆっくりと、やがてやや強めにその柔らかな乳房を揉みしだいた。心の裡で夢に充ち満ちた昭和を反芻しながら、その美しい紡錘形に溺れ切った。そこには色情の如きものは存在せず、ただ幼児が覚える安堵感に似たものがあつた。時折、感嘆の声を上げつつ、心底幸福そうな貌をしている老人の姿を見て、自分は不意に嗚咽しそうになってしまった。「思う存分」と約束されたその取引が終わり、老人は「良かった」と呟くと、暫く瞑想した後、札束の入った袋を布団の下から取り出した。實華子に手渡された報酬は、予告された金額の倍額に増やされていた。

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

二日後、K老人はまるで冗談みたいにあっさりと逝った。その死に顔は、今まで自分が見たどんな表情より穏やかなものであった。

みなしごさとえ

芙蓉の大きな花が咲いている。

一日美しく咲いて散るのだ、そのあかしのよう
しなびた白が地に浮かんでいる。

八王子も小平も今日は同じように暑かった。

たまらず買った茶伊右衛門がボトルのなかで沸騰している、
坊主が最後のお経を読んでいる。

旅と性愛の詩人、性愛と旅の詩人、あるいは性愛の旅の詩人は
棺の船に乗っていた。

そのあかしのように、

黒い鴉のような人間たちが押し黙って座っていた。

最後の航海の別れの日

小平も八王子も燃え立つような暑さだった。

浅川の、川の流れて育った若い、愛する詩人の早すぎる旅立ちを見送ったとき
旅と性愛の詩人あるいは性愛の旅の詩人は

自らの体内のすべて

秘められた穴という穴のすべてに

アルコールの精を流し込み

浅川の流れのように

流れて見せた。涙の水で。

激しさと優しさと、傲慢さとしなやかさを肩にかけて

荒れたり、なごんだり、嫌いな日本もときには好きになったり、

旅の詩人、性愛の旅を繰り返して

生涯の最後の真理のように、

船の棺に乗り込む。

みなしごハッチのように

出会いと別れを、たぶん快活に演じるだろう。

その舟の見知らぬ乗組員たち、暑い夏の旅人たちとも。

芙蓉の大きな花が咲いている。

花の奥底で屹立している雌蕊が

かなたのそらで受粉を待っている。

水の女

湾のほうから、甘いような苦いような風が吹いてきた。巨きな書物が閉じられるように夕映えがあり、夜が来て、街はオルガンの響きをあげていた。北町をはしる万国大通を越え、潮の匂いが濃くたちこめる境町の店で一杯やった。そこでたまたま出遭った音楽の、スチール・パンという燦めく楽器の圧倒的な即興に驚かされた。トリニダード・トバゴからやって来たという男の、パフォーマンスと言うのもためられるような、すさまじいまでの技倆である。われわれはグラスを片手に持ちながら、その限りなく微分されてゆく眼にも止まらぬ無窮動なリズムのうちに、嬉しいような悲しいような、無限の明るさの中で涙が出る、という降霊にも似た体験をした。あれは深夜にもかかわらず、真昼のパレードそのものだったのだ。やがて音楽が終わり、酒も飲み干して三三五五、客たちのうちの一人になって店を出る。少し霧が出はじめて、潮の匂いのたちこめる橋を渡り、燦めくもののない夜の中を黙りこくって。人は、いつかば家に帰らなければならぬのだ。ふと向こう岸に人の気配を感じる。その岸壁には浮き桟橋があるらしい。白いテーブルと椅子、いままでわれわれが聴いていたのとは、似ているようだがまた違う音楽と酒、遠くひびいている音楽は、ラジオから聞こえてくるのか、闇に沈んでここからは見えないジャムセッションでも隠れているのか、よくは分からないけれど。それから少し胸の開いた、裾の長いドレスを着た女の笑い声。彼女らは一人きりではないようだ。あちらからこちらへと、灯りが移動する。しかし、と私は考える。あれらはさつきまで過ごしていた、まさにわれわれの時間の写し絵、騙し絵ではなかったか。向こう岸で女は何かを喋り、また笑い声を立ててからふいにいなくなつた。橋の向こうには皎々たるテーブルが取り残されている。横を見ると妻が笑っている。あれらの女のように、少し酔いながら。水明かりを受けて、私はたぶん愛されているのだと、胸に焼きごてを押し当てられる思いで痛覚した。

岩田英哉

Hart Crane を読む。(承前)

わび、うらやも男色詩人の詩を男色者の詩として読むことに入って参りたいと思います。最初を理解して参りたい記号、暗号は、アルファベットの A という文字の意味です。

Merrian-Webester Online から引くと、

Definition of A

- 1 a : the 1st letter of the English alphabet
- b : a graphic representation of this letter
- c : a speech counterpart of orthographic a
- 2: the sixth tone of a C-major scale
- 3: a graphic device for reproducing the letter a
- 4: one designated a especially as the first in order or class
- 5 a : a grade rating a student's work as superior in quality
 - b : one graded or rated with an A
- 6: something shaped like the letter A

7 capitalized : the one of the four ABO blood groups characterized by the presence of antigens designated by the letter A and by the presence of antibodies against the antigens present in the B blood group

この引用の定義の6番をご覧下さい。大文字の A に形状が似たものを A で表すとあります。

結論から申しますと、アメリカの男色者は、この A を、人間が前屈みに腰を折り、そうして尻を上げて、肛門性交のための姿勢をとる、そのような男色者のポーズとして使っているのです。

この A を想起させる言葉であれば、それはすべて男色の、男色者の、そのようなポーズを裏で意味することになります。

Crane が 10 代で書いた恐らく最初の詩、C 33 には、tent という言葉が出て来て、

And he tented with far truths he would form

とらう一行がありません。

tent は、文字通りにテントを張るという意味ですが、その形状は A であり、それはそのまま男色の行為を意味するのです。

同様だ、loft (屋根裏部屋) とか lofty という言葉も Crane の詩の中に出て来ますが、その形も A ですのよ、同じ姿勢をとることを意味しています。(この loft という言葉を同じ意味で、To Brooklyn Bridge にも出て参ります。)

そらするよ、C 33 の上の一行の表の訳は、

《そして、彼は、彼が形作りたいと思つてつくった遠い数々の真実でテントを張った》

ということになり、裏の訳では、

《そして、彼は、彼が形つくりたい、世間とは際立って異なる衷心から、尻を上げ、肛門性交のポ一

ズをとった》

という訳になるでしょう。

(この詩を書いた10代の Crane は既に男色者であったことを、この詩 C 33 は意味しています。C 33 という題名の裏の意味も興味深いものがあります。)

この題名を発声すると、C 33 ではなく、C 33 ですのび、See a space thirty three となりませう。A space が隠れています。男色者の空間、場所を見よという意味になります。

また、thirty three は、この詩の中に出て来る、類似の発音としてある、Thorny tree にかかっています。棘のある木とは、男性のペニス、それも肛門に入ってきたペニスの感触のことです。ですから、この言葉は受け身の側の男色者の言葉です。See thorny tree、ちくちくする棘のあるペニスを見よという意味です。ですから、10代の Crane は、肛門にペニスを入れられた体験を C 33 で歌っているのです。

A という文字は、辞書をひくと、またその複数形が a's であり、発音が尻の穴に同じであることから、この A を冠したことには、そういう意味からも、男色者としての意味が掛けられています。この A についての暗号としての記号の意味が、まづ最初に理解をしてもらいたいことです。

さて、大文字の A がそうであれば、当然のことながら、小文字の a もそうだとということになるでしょう。

その上、Black Tabourine の中から、不定冠詞の a のついた名詞を拾い出して、列挙すると、次のようになります。

Crane の詩を解説するには、まづ英語の不定冠詞、a または an を探してみるのです。そうすると、次のようなものがあることに気付きます。

a black man
a celler
a bottle
a roach
a crevice
a carcass

black man

a black man は、文字通りに罪深き男色者

a celler は、男色者の地獄、秘密の場所

a bottle は、その形から、男色者のペニス

a roach は、コキブリであるが、しかし cockroach と同じこの cock、即ちペニスが無い、言わば男としては性的に無能力の、そのような男、男色者という意味です。

このように男色を意味する語を隠して顕すというやり方を Crane はよく行います。

詩集 The Bridge の中の一篇、Van Winkle と同じ題名、本来ならば、Rip Van Winkle の語ですが、敢えて Rip と同じ男色に関わる言葉を隠して題としようのようです。

Rip とは、ペニスに歯を立てて快樂を与えると同時に、いざさかの血も流れる位に傷をつけるこ

♪。♪の Van Winkle ♪♪の 詩は、
 ♪の Rip ♪ Crane ♪の 詩は、
 詩の 詩の 詩は、 Rip-tooth ♪♪の 詩は、
 a crevice ♪♪ 男色者の 詩は、 ♪♪の 詩は、
 a carcass ♪♪ Webster ♪♪の 詩は、

- 1: a dead body : corpse; especially : the dressed body of a meat animal
- 2: the living, material, or physical body (I hauled my carcass out of bed)
- 3: the decaying or worthless remains of a structure <(the carcass of an abandoned automobile)>
- 4: the underlying structure or frame of something (as of a piece of furniture)

♪♪の ♪♪の 性的快楽の絶頂を経験した後、死体のように横たわっている男色者のことか、あるいは、そもそも男色者が人間としては、男性の能力もなく、さながら生ける屍だという意味です。そうするとこの詩の訳と解釈は、次のようになります。第1連から見ましょう。

【裏の訳】

The interests of a black man in a cellar
 Mark tardy judgment on the world' s closed door.
 Gnats toss in the shadow of a bottle,
 And a roach spans a crevice in the floor.

男色の罪に穢れた男色者が秘密の場所、地獄か地下牢ともいうべき場所にいる。

男色者の興味は、世間から閉め出された、あるいは男色者が世間に対して締めて閉ざしたドアの上に、遅い判決を書きしるす。

ペニスの蔭で、蚊がさすような微妙なトス、ペニスを下から上へと

快楽を感じるように撫で上げる、そのことよ。そうして、

ペニスは、大きくなって、この地獄のフロアーで

男色者の尻の割れ目に突っ込んで、目一杯鰓も張り出すのだ。

【解釈】

男色者達は、快楽をむさぼり終わるごとに、ドアに回数を書き、そのよかった程度を何らかの印で書きしるしたものでないだろうか。それは、快楽の余韻を味わうのに忙しく、点数を書きしるすのは、つまり、判決を書く事は、それよりも遅れてしまふのだろう。

判決と訳したのは、Chaplinesque にあつて、男色者の性的行為を歌った中に、
 our obsequies are, in a way, no enterprise.
 とあるからであらう。

Chaplinesque を読むと、我々男色者の世界の死刑執行は、男色者の流儀で、やりかたで (in a way)、ビジネスなのではなく、利害打算のない純粹なものであり、そのような形で男色者は性交の一回毎に、死ぬのだといっているからです。

この obsequies (死刑執行) は複数でもありますから、実際に、男色者の裁く側がいて、相手が絶頂のときに、死ぬとか、死刑だとかいうのだと理解することができます。

Toss は、Crane の好みの言葉、他の詩でも出て来ます (たとえば、同じ詩集の Sunday Morning Apple の第5連の1行目)。

大きく膨張した状態の亀頭を林檎と呼んでいます。

また、林檎 Apple を、A people の neumatic (母音を約した縮約形) にして、男色者達という意味に掛け、その林檎を toss すると歌うのです。

林檎をトスするとか、わたしの林檎をトスしてくれと、実際に男色者達は性行為の最中に、その言葉として使うのだらうと思えます。

次に、第2連を見て見ましょう。

Aesop, driven to pondering, found
Heaven with the tortoise and the hare,
Fox brush and sow ear top his grave
And mingling incantations on the air.

これも、表通りで、普通に読むと、本当に何を言っているのだらうと思うような詩です。

【表の訳】

イソップは、何かに駆られて沈思黙考しているうちに、亀と兎のいる天国を見つけたが、狐の尻尾と牝豚の耳が、イソップの墓穴を頂点にもってゆき、そうして空気に触れて呪文を混ぜる。

【裏の訳】

イソップ (男色者) は、尻を上げて A のポーズをとっているが、強いられて心の中で静かに味わっている、兎と亀の天国、すなわち感じてはやく行くのが勝ちなのではなく、行くのが遅い方が勝ちなのだというお話通りの天国を発見するし、狐の尻尾のブラシと牝豚の耳で、イソップが快感の絶頂で死に到るように感じさせる。周りで、行くのがもっと遅くなり、絶頂感が長く続くようにという呪文を、実況中継して、そこに混ぜ入れながら。

【解釈】

Aesop とは、これも Crane 好みの言葉で、最初から仕掛けがあります。

このイソップという童話の作者の名前をひっくり返すと、Pose A、即ち A という尻を上げた姿勢

をとる、その姿勢という意味になるからです。

また、イソップは、アフリカ生まれの黒人であったという説があり、それが念頭にあって、Crane は、この詩を書いています。それは、第1連にある a black man に始まり、第3連にある Africa に到るまで、そうです。黒い色が何を意味するかは、上述の通りです。

表の訳の方に無理があつて、表の訳を考えていると、そのまま裏の訳に到る。表裏不可分という感じが、訳していると、します。

狐の毛でできたブラシと牝豚の耳というのは、膨張したペニスには、特に優しく、感じやすくさせるものなのでしょう。だから、そのときの呪文とは、すぐ行かずに、もっと長く持ちますようにという、そのようなおまじないの言葉です。

兎と亀の話は、イソップの有名な話ですが、ここでは、速い兎が負け、遅く行く亀が勝ちという結末から、先に行ったら(射精したら)負け、遅く行った(射精した)方が勝ちという、そういう話を、性行為の最中に、周囲の男色者達が実際に、そういつて囁きしていることをいつているのだろうと思います。

On the air は、Crane の色々な詩によく出て来る言葉ですが、結局、これは、性行為をしているふたり(あるいは、もっと多くの複数人)の周囲にいる他の男色者達が、その行為を見ていて、実況中継をしているととることが、一番自然のように思うので、そのように訳しました。mingling incantations on the air を、そのまま普通に訳しても、全く何を言っているのか、わからなからうまいでしょう。

(つづへ)

confidence

シュレッターを買った。裁断という決断は、これみよがしな復讐に似ている。(後藤)

アントン・ブルックナーに嵌まりました。近所の中古レコ屋さんで、フィリップ・ヘレヴェツへ指揮の交響曲第7番をたまたま手にしたのが馴れ初めでした。丁度グスタフ・マーラーが頭の中で飽和していたので、たちまちブルックナーと照応してしまつたのです。後から知つたのですが、ブルックナーと言うひとは、かなりエキセントリックな人物のようですね。その辺りも、垣根を低くしてくれたようです。まあ、「芸術家」は、誰でも多少エキセントリックではあるようですが。それにしても、まさかこの自分がブルックナーに嵌まるとは、想像だにしていませんでした。悔しいけれど、ブルックナーの「歌」は、とても美しいのです。(野村)

十月二十日の誕生日に今回の掲載作品の一つである「戦禍舞踏論」を表題とした第三詩集を刊行する運びとなつた。「三年ごと」に自分の誕生日に詩集を刊行する」という目標を掲げていたため、二〇〇六年刊行の第一詩集、二〇〇九年刊行の第二詩集に続き、今回も目標通りの時期に刊行出来る目途が立ったことは、何より嬉しい。舞台裏を明かせば、一時は作品数が足りないやうに思え、今年の刊行を諦めて、来年送りにすることも考えたのだが、何か目に見えない大きな力が後押ししてくれたようで、六月末の原稿締め切りまでに何とか掲載候補作品を揃えて版元に入稿することが出来た。もちろん、その前提として、『tab』という発表の場があつたからこそ、ま

つた数の詩作品を集められたことは言うまでもない。これから、デザイナーとカバーや本扉・章扉などのデザインについて打ち合わせをする予定。詩集は自己の存在証明でもあり、その制作過程は楽しい。(秋川)

死生観も信仰もなく、ただ真面目に働いて生きた父でした。またいつか元氣になったら家に帰つて暮らせると思っているのかもしれませんが。これからの道を父が迷わないように、わたしはそつと祈っています。(福島)

七月の新橋演舞場は予約があつという間に埋まつたので(高い切符はあつたけど)諦め、国立劇場の歌舞伎鑑賞教室に行った。演目は愛之助の毛抜。最初に解説が入るが、芝居が始まつたらあとは普通に芝居をやって途中で水を差したりはしない。ただ、想定外だったのは、中学生、高校生の団体様大量にやつてきたこと。そりゃ鑑賞教室だもんな。売店の人に聞いたら、土日以外はそういうものらしい。目の前の中学校は、少しでも黙らせようという工夫なのか、男女互い違いに座らせている。そんなことで効果があるのかなあ。先生が注意事項を説明していてもきやつきや言つていて嫌な予感。しかし、感心にも始まつたらみんな黙り、それからやすやすと眠つていった。残念だったのは、「松嶋屋」のかけ声をやってくれる人がいなかったこと。そして、私も肝心なところで寝てしまったことだ(あ、これ行分けにして次に使えばよかった。ところで、今思い出しましたが、<http://longrail.co.jp/recog/>に新【仮想】詩集『見覚えのある道』を置きましたのでよかつたら見てください。全部tab掲載作

なので目新しいものではありませんが)。(長尾)

明日から奄美に行く。帰るとも言ってもいい。長年、私の無意識の、ろくでもない番人が抑圧してきた「故郷に帰る」ということを実践するのだ。齢六十四歳になって跳ね返すことができたというのはタテマエ。実は老父の年の祝いを口実にして、この夏の二週間をそこで過ごすのだ。そこにいると、わけもなく噴き出る怒りのようなものを抑えることにも苦労するにちがいない。楽しみとおそれ。(2012/07/30、水島記)

いよいよ夏で、盛夏という言葉もふさわしい毎日となって来た。最近、詩文のブログ「詩文楽」に対して、散文のブログ「散文楽」を開設しました。安部公房を論じておりますが、興味が尽きない作家だと、あらためて思います。ご興味のある方はお越し下さい。次のURLアドレスです…
<http://sanburaku.blogspot.jp/> (岩田)

詩人Sさんの、連作詩の中に、バッハのフーガの技法全曲(未完)ライヴを聴いた夜の事があった、感銘をうけた。

当夜の若いピアニストは、さいごに、コラール『われら悩みの極みにありて』をプログラムに入れていたということだ。(和田)

このあいだ、野村龍と連れ立って第十六回東京ポエケットに行ってきた。そのまえに行ったのが同会の第一回開催だから、もう十五、六年以前の昔になる。そのときから比べると、規模や参加人数はずっと小さなものになっていることに今昔の感を覚えた。商売という点からいえば、縫美千代さんや榎本櫻湖さんに詩集を買ってもらった。また北爪満喜さんや甘楽順治氏にご挨拶申

し上げた。第一回るときは水島英己氏に初めてお会いし、荒川純子さんに『ゼノン、あなたは正しい』を買ってもらったのだが、時代は遷ったのだ。今回はワーズアウドの坂入進氏のご協力のもと、私の氏名の入ったポップや写真葉書などを作ってもらったが、これは非常にハズカシかった。だがそのせいで、吉田群青さんもお会いでき、また驚くべきことに、四十年前に出した拙処女詩集を高田馬場の文献堂で買ったという人が来て、拙詩集を数冊買って行っていただいた。名刺を請うて見てもらって関学大で建築及び建築史を研究しているらっしゃる先生みたいだ。そのかみ早稲田の学生だったのだろうか。ちなみに、今回持っていった詩集その他は十数種類に及び、部数はその二倍強というのだから家人には苦労を掛けた。まあ、思った以上に売れたので徒労感はある残り残っていないけれど、持っていった散文集の『楯的思考』は全然駄目だったが、私の詩集のほうは「店に出せば売れる」のだった。(倉田)